

社会臨床の視界

(5)

「影」をとらえる—感情について—

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

影をみつめること

本マガジン第2号でニーチェを引用した。「怪物と闘う者は、そのためおのれ自身も怪物とならぬように気をつけるがよい。お前が永いあいだ深淵をのぞきこんでいれば、深淵もまたお前をのぞきこむ。」という言葉である（ニーチェ『善悪の彼岸・道徳の系譜』、信太正三訳、ちくま学芸文庫。第4章「箴言と間奏曲」）。その深淵は、闇、病みと言い換えてもいい。さらに社会病理ともいえる。もちろん「怪物」も言い換えて理解した方がいいだろう。その第2号で記した加害者臨床論からすれば「加害者」となるが、「男性」として考えると思考が広がる。もちろん、子どもでも、老人でも、大人でも、教師でも、女性でも、もっと具体的には、オバマ大統領でもオサマビンラディンでも、誰でもいい。そして何よりも、「自分」を忘れてはならないだろう。その「自分」に潜む深淵は心理臨床や精神分析において「影」として把握されてきたことと重なる。今回はその影について、男性性とかかわり考えてみる。もちろん影は否定的なことを意味しているのではない。潜在的な面がそこにあるということとして理解すれば肯定的で、もしかすれば創造的でさえあるかもしれない役割が見えてくる。

第2号に書いた加害者臨床論では、「陰翳が写しだすことへの関心」を述べ、「悪を抱えていきる」と題し、暴力と虐待をみつめるべき深淵としておき、人間の影としてそれらを把握することの大切さやそのことの持つ社会臨床的意味について考えた。ここではさらに暴力・虐待等のわかりやすい「陰翳」だけではなく、自分とは異なる向こう側、退けていること、観たくないと思っていること、意識下に沈めておいてあること等を影として考えてみる。「いま・ここ」で光があたり見えていて、多少とも心地よく関係を取り結んでいることに比べると相対的には沈んでいる事柄という意味での影である。それらは日常的には忘れられている。

たとえば、子育てしながら忘れていた頃の自分の記憶やそれをとおした親との関わりの記憶が浮かびあがる。別姓の連れ合いから教わることは、夫婦であればどうして名字を同じにすることが自然だと観念していくのか等、選択的夫婦別氏制度をはじめとして言葉としてのみ知っていたが生き方にまで腑に落としては考えもしなかったであろう事が多い。子どもの手をひきながら歩いた街は第2の故郷になるといったのは哲学者の鶴見俊輔さん。当時2歳半の娘を連れた「子連れ単親赴任」の経験もそうだった。その時はカリフォルニア州立大学バークレー校にいた。その閑静な大学都市の

保育園界隈の街と家並みは鮮明に覚えている。日本では京都の仁和寺の近くにある御室の保育園に通っていたがその土地とともに関わった保護者や子どものことはきちんと覚えている。家族の凝縮性が高まる旬の時期には土地や人間関係全体への感受性が増すものなのだろう。しかし日本の子育て事情はそう楽観的ではない。男性にとってこの時期は働きざかりなので影に追いやっっているのが育児であり残念だと思う。男性の感情生活を豊かにさせてくれる恰好の機会なのだから。

こうして深淵を「向こう側からのまなざし」と置き換え、影を多様に表象してみると自分の見えなかったことや暮らし方において忘却してきたことがたくさんみえてくる。もちろんなかには見なくなかったこともみえてくるので怪物なのだが、それはそれでつきあい方を吟味すると幅が広がり面白いことの方が多い。

影のもつ潜在力

私が社会病理や逸脱行動のなかでもとりわけ暴力や虐待のことに関心をもったのはこの影が作用していたと思う。それを意識化することは加害者臨床にかかわる自分の立ち位置の理解としてつながっていった。「加害者臨床にかかわる私は誰なのか」という問いである。その手がかりはマイケル・ホワイトのナラティブ・セラピーであったことも第2号で記した。マイケルが「共犯関係」という言葉を使っていたことは紹介したが、重ねて引用すると、PTSDと診断されたベトナム退役軍人のセラピーに取り組みながら、暴力加害と男性とセラピーと社会の在り方を指摘したその一言である。

戦争のPTSDへの対応に携わるものの立ち位置について、「彼らをベトナムへ送ったのは我々であるというコミュニティの共犯性」と言い放ったのだ（『人生の再著述』、小森康永ほか訳、ヘルスワーク協会、2000年、80頁。原書ではcommunity's complicityとなっている）。これにはいたく感銘を受けた。こうした理解は、治療同盟という意味にはとどまらない、社会臨床論としても肝心な点だろうと考えさせられた。

もちろん「共犯関係」というのは厳しい言葉なので、いったんは影として一般的にも言えることへと拡げて考えるのがいいだろう。たとえば「傷ついた癒し人論」がある。アドルフ・グッゲンビュール・クレイグは『心理療法の光と影—援助専門家の＜力＞』（創元社）等でこのことを展開した。これはユングの「治療者元型」論に基づいている。クライアントは自分を治してくれる人としてセラピストにこの元型を転移する。これをセラピストに転移すると、自分のほうはそれの影となり、「患者元型（wounded=傷ついた人）」に取り憑かれる。その結果、事態が悪化する。逆に、セラピストのほうで「私になんとかしないと」と焦ると、自分自身に「治療者元型」を転移するため、自分の「患者元型」をクライアントに投影してしまう。するとなかなかクライアントのほうに自然治癒力がみなぎってこない。この内なる力のことはストレングス strength とかレジリエンス resilience とも言われていることと重なる。

同じことを河合隼雄はこう語る。「・・・対極的な要素を含んだ存在が元型である。たとえば、治療者と患者、癒す人と癒される人等である。分析家が自分を『健康で病むところのないもの』と決めてしまうと治療

者元型が分裂的に作用し、治療者は治療者、患者はあくまでも患者となっていく。患者が自らの治療者元型の働きでよくなっていくことがなくなっていく。まず、治療者が自分のなかに存在する患者を認識すること」（『ユング心理学と仏教』河合隼雄、岩波現代文庫、134頁）と。

立ち位置を問うていくと、暴力や虐待を扱う加害者臨床に携わるものが自らの内に抱えた病者の側面とは何だろう、男性性の問題をもつ人への支援を行う人が同じように抱える病者の側面とは何だろう、とこんな具合にいろんな疑問がわいてくる。マイケルの問いとそう遠くはない。さらに、対人援助職者は「救済者願望」を影にもっていることが多いので、自己理解や自己覚知ということがことさらに重要となる。臨床における倫理教育や基礎理論の重要性につながる広い課題を影は投げかける。

男性と影

問題はその「暴力と影と男性性と私」の関連のこと、である。対人関係が不定形にこの世にあるのではなく、母子関係、夫婦関係、友人関係、師弟関係等というように、関係性をかたどる枠があり、そこから構成されるように機能する相互作用があり、感情が生起する。関係性としての偏り、越境（境界侵犯）、支配と従属、癒着や対立等が含まれ、関係性のねじれが問題となる。その形状をなす有力な変数としてジェンダーがある。しかしジェンダー論は「女性発」の議論が多い。そうすると、男性と男性性は暗数となり、ひどい場合は仮想敵と置かれることもある。これは女性や女性性からみた影である。であるならば、その影とし

ての男性と男性性を、男性の言葉できちんと見つめたいと思った。そうすることでジェンダーの視点が豊かになるはずだと考えた。男性が男性としてみる影ということである。結果として、女性をもつ男性性をも映し出すので、女性の暴力性・攻撃性等が浮かび上がる（かもしれない）。こうして、当面、男性と男性性のもつ暴力、攻撃性、権力（性）、操作等を社会臨床の視界として考えてみることにした。

少年として息子として夫として生きてきた過去の、そうした男性と男性性の影を見つめることは具体的には何かを劈開していくような作業となるはずだ。マイケルのいう「共犯としての加害のなかにみる自己」をはじめとして、「被害を抑圧・解離させてきた自己」、「知識と身体と感情と心理が統合できない自己」、「女性性をもつ自己」、「セクシャリティとエロスの多型倒錯性（ファンタジー）をもつ自己」、「肥大化し傲慢な自己」、「ひきこもる自己」、「ピーターパン的（永遠の少年）な自己」等が浮かび上がる。

影をみる語彙や概念も要る。さらに見たくないものもある。いきなり個人のレベルでジェンダーの影をみつめると、自己否定に傾斜するほどの危うさもでてくるかも知れない。とはいえジェンダーの作用はマクロな変数なので、それを直接に個人に還元させてしまうと難儀な自己覚知となる。そこでいったんは男性文化のもつ影のストーリーラインをだしてみる。男性性ジェンダーは社会や文化の表象でもあるので、いったんそれは個人史にどのように作用するのか、逸脱的行動にどう親和性があるのか、臨床的課題へとどうつながるのかとトレースしてみることが自問自答のようにしてつ

づく。残念ながら教育分析やスーパーバイズの視点のなかにこうした男性性ジェンダー論は組み込まれていないと思う面もあるがそれはまた別の機会に。

マクロな変数（この場合は男性性ジェンダー）とミクロな臨床・個別性（たとえば加害者臨床や司法臨床）の関連性を問うということは社会臨床の醍醐味である。マクロとミクロを統合する「媒体」が自分の身体、行動、感情であり、男性と男性性の軌跡となる。〈場〉としてのそうした身体、感情、親密さがあり、その関係性を構成する社会の形状が浮かび上がり、そこを相互作用としてとりだして対象化すると、クライアントが周囲に組織している、あるいは囲繞されているシステムが重要となる。網の目（メッシュ）のように作用している「関係性の文法」のようなものがある。男性と男性性を特に形容する言葉として、「ホモ・ソシアル（男性同士の社会的連帯や絆のこと）」、「ホモ・フォビア（同性愛者と見られることを恐怖する心理）」、「ホモ・セクシャル（同性愛）」、「ホモ・エロス（同性に感じる生の憧憬的な欲望）」がある（このことは以前にも指摘した）。そして臨床でもよくつかわれる「闘争か逃走か」も男性性と関連する。こうした男性と男性性を形状化する「関係性の文法」はある種の生の様式のようなものである。

影を楽しむー絵本の読み方教室と隠れたカリキュラム

ミクロなこととマクロなことの連関を考えると、社会へと広がる問いを同時に自己へと再帰する問いとしても立てることが求められる。社会と臨床の連関を問うことは

それを意味する。マイケルのというような反省的な立ち位置となる。とするとその再帰性は難儀であり、個人としては痛い、受苦的な問いとなる。でもそれが暴力や虐待等の社会臨床的な主題となっているならば、自己を被験者にするようにした問いとしてそれをいったん影として仮置きし、外在化させてみることもできるはずだと考えてきた。これは自分を対象にした当事者研究のタイプだと位置づけることができる。暴力と虐待に男性は加担しているという具合にマクロ性だけを強調すると、対人暴力からの脱出をめざす臨床性が飛んでしまい、男性と男性性それ自体を影にしてしまう。男性には懺悔を迫るだけの仮想敵としての男性となる。現実にはこうした問いを立て続けるのは困難だ。集団性に帰属させてステロタイプな男性観を想定していることになる。反省を迫るようにして男性に何かをさせようとするアプローチは教育の発想であり、なかなか届かない。ジェンダーのテーマにこのことは多い。たとえば、「育児をしない男を父とは呼ばない」という公共広告はその典型だ。ステロタイプな男性や父親を想定した集団的カテゴリーの押しつけでは動機づけられない。

そこで男性と男性性にねざした熟させ方を練り上げたいと思い、批判ばかりしていても男性の役割の多様化は進まないの、ジェンダー問題への男性の参加促進の方策をいろいろ実践してきた。子どもがまだ幼い頃、男性の育児をすすめる取り組みに関わっていた。日本の父親の育児と家事の時間は一日10分だとか、先のキャンペーンのようにそれ自体は男性には何の効果も持たないような脅しのような宣伝文句は聞き飽きた。そんなことでは男は動かない。実施

した私も楽しかったし、若い父親たちにも好評だったのが、男性のための感情教育という隠れたカリキュラムをもった教室だった。保健所で開催した「絵本の読み方教室」がうけた。

お父さんこそが読んであげた方がいい絵本を選び、気持ちを込めて読む練習をする。「ぼくのパパ？ふつうのおとなだよ。やさしいけど。でもたいていは、なんかちがうことを考えてる。遊ぶことができないし」という少年のつぶやきをもとにした絵本は、『小さくなったパパ』（ウルフ・スタルク、小峰書店）というタイトルがついていた。これを読んで発案した。そう、これはてっきり私のことかと思ったからだ。私も娘と遊びながら別のことを考えていることが多いからだ。たとえば研究のこと。なにかネタはないかといつも考えてしまう。純粋に遊べないとはこうしたことを言うのだろう。幼い頃のように遊べなくなっている自分に気づく。いつのまにか鎧を着て、世間にあわせ、日々のことに精一杯で、何かしら流されていくようになってから、ずいぶんと時が経ったように思えてくる。そこで「絵本のすすめ」を思いついた。

絵本の読み聞かせは、新しい時空間につかのま誘ってくれるいいチャンネルだ。とくに父親の「男らしい」人生からすると、一種の「癒し」のような作用を果たしてくれる。お父さん向けの、お父さんが読んだ方がいい絵本がたくさんあるので、お父さんも元気がでる、育児促進のための、子どもも喜ぶプロジェクトを組んだ。性別役割分業を肯定するわけではないけれど、怖いお話は男性の出番だ。やはり低い声がいいのだろう。おばけや地獄の話はお父さんの方が喜ばれる。『じごくのそうべえ』（田

島征彦、童心社）はおすすめだ。また、お亡くなりになったが佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』（講談社）は男性性を考えるためにもよい。いつまでも死なないと威張り散らす「男らしいオスねこ」が変化していく様がよくできている。『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン、篠崎書店）は人間によりそいながら生きる木のお話。私たちが誰かに育てられて生きているということを見せてくれる。『パパ、お月さまとって』（エリック・カール、偕成社）は、はしごをかけて月をとろうとするパパの話。なんとも雄大で、気持ちがおおらかになる仕掛け絵本である。仕事がうまくすすまない時に読むと救われる感じがする。『おとうさんはウルトラマン』、『帰ってきたお父さんはウルトラマン』、『おとうさんはウルトラマン—おとうさんの休日』（他にもあるが、みやにしたつや、講談社。さらに同じような発想で怪獣シリーズがでてくる。宮西達也『おれはティラノサウルスだ』他たくさん。ポプラ社）。外で強く闘うウルトラマンも家に帰れば子煩悩だ。胸のアラームが「ピコン！ピコン！」となって「シュワッチ」と飛び立ち、帰る先はウルトラマンの家。そこには子どもウルトラマンが待っている。ここぞとばかりに「ねえパパ、ウルトラマンごっこしよう」とおねだりする。「ええー、さっきまで本当の闘いしていたんだぞ！」と思いながらもうれしそうにウルトラマンごっこする。こうしたやりとりがほほえましい。『ピートとうさんとティムぼうや』（マーカス・フィスター、講談社）は、ペンギンパパの話。自然体の子育てが雪と氷のなかを生きる暖かさを際立たせている。

紹介すればきりが無い。父親にとっても元気のける育児の薦めはたくさんあるはず

だ。たとえそのかわりが 10 分でもいい。感情の交流ができる。脅しのような育児奨励はうまくいくはずがない。絵本はもちろん棒読みではいけない。大事なことの一つめは、感情や気持ちを込めて読む、二つめは、ゆっくりと語りかけるようにして読む、三つめは、楽しみながら読む。つまり、演技しながら、時間の流れをゆっくりめにきりかえ、空想の世界に身を漂わせるということが肝心だ。こうした感覚は男性の日常生活にはないことだ。だから効果がある。男性や父親にとってのエモーショナル・リテラシーである。もちろん練習は要るが、いつでもだれでもできる育児である。このプロジェクトのもつ隠れたカリキュラムである。

育ちのなかの影

もちろん育児の現実が多様でもっとたくさんあるが、こうした取り組みをとおして、自分の子ども時代を理解するよい機会になった。そういえば私は育てにくい子どもだとよくいわれ、癩癩がそうとうひどかったと母がよくいっていたことを思い出した。また、周囲からは寡黙な少年だといわれてきた。幼い時からそうだった。しかし、内なる言葉は豊かにあったと思っている。寡黙で表情が少ない少年は、学校の図書館の書物を全部読もうと決意した。SF、ホラー、探偵小説に純文学となんでも読んだ。ずいぶんと言葉がたくさんあると内心では思っていた。外見とは異なるのだと。しかしそもそも感情を表面にだすような人間関係が豊かにあるわけではない。沈黙考するのが好きだった。そんな寡黙な少年は、高校では山岳部に入った。ますます孤独に

憧れるようになった。体力づくりとともに山岳小説をよく読んだ。山岳部は汗くさくて青臭い。青臭いのは、どうして山に登るのかという問いに何とか答えようとしていたからだ。これはまじめな話である。山に行く道中、テントのなかで、部室で際限なく仲間や顧問教師と話をした。こうして青臭い、つまりは文系のクラブだということがよく分かった。しかしこれは今でも役だっている。この連載がそうだ。答えのない、あるいは答えの出にくい問いが好きなのだ。いや、問いそれ自体が好きなのかも知れない。

好きな映画の 1 つに『イントゥ・ザ・ワイルド』（ショーン・ベン監督、2009 年）がある。1992 年にアラスカの荒野で死体となって発見された若者の実話がもとだという。大学を優秀な成績で卒業した 22 歳の主人公は期待を寄せる家族も貯金も捨て、中古車で旅に出る。その車さえも捨て、一人旅を続ける。道中の出会いと別れを繰り返す。自由に生きようと決意した彼が最終的に目指したのはアラスカの荒野だった。孤独がとてもきれいに描かれている。私も若い頃、とても憧れた。でもそれは対人関係力を育まなかった。上司のいない職業しか向かないと幼い頃から思っていた。確かに実際そうで、今は上司のいない自由業である。やはり、影をみみるとそこに指示されて生きてきたように思えてくる。

ネット社会の影響なのか、心理臨床化する社会の結果なのか、シューカツを強迫するような社会のなれのはてなのか、そうしたことすべの相関なのだろう、対人関係力やコミュニケーション力をやたらに強調する社会である。どうしてこんなにもコミュニケーションや対人関係に力点が置かれる

のだろうと、寡黙だといわれ、表情がないといわれた幼い頃と重ねて考えることが多い。饒舌に何かを語り、対人関係もよく、快活に感情を言葉に表現するというある種の「善き前提」が対人援助職者に仮定されていないだろうか。そんな人間ばかりではないからこそ、芸術が発達し、スポーツに躍動し、臨床から学ぶことがある。そこにこそ深淵があると思う者からすると、寡黙だといわれつづき、孤独を好む若い頃の姿は、大切にしたいと思う影となって愛おしくなる。その頃にはもっとファンタジーの世界が豊かにあったように思う。夏目漱石をはじめとした純文学のなかにあるホモ・ソシアルな表現に、同性同士の関係を意識する思春期青年期であったことが反応していた。三島由紀夫の小説にも何かしら危険な誘惑を感じていた。モデルとライバルの男性同士の葛藤に憧れたのだろう。家のなかで女性と母性に囲繞された環境だからでもある。寺山修司の世界も同じような吸引力をもっていた。それは父性や男性性の不在という高度経済成長時代のジェンダー感覚であるのだろう。後にダニエル・ゴールマンの感情的知性 **Emotional Intelligence=EQ** という言葉を知ったが、感情に揺らされながら知的な関心が形成されていく過程が読み取れる。

身体と行動ーハゲ現象のエピソード

男性性の傷つきの独特の困難さ（にもかかわらずそれを表現する言葉がないこと）、加害者臨床としてジャスティス・クライアントに関わる自己（規範・正義、ケア、逸脱性、異化願望）、彼らから教わることの多さと共犯関係にある自分の立ち位置の悪さ

は、影をなす。しかし、その影のなかにある「自分の伸びしろ」「もうひとつの自分」「未開発な自分」「攻撃性を別のかたちに変えている自分」、つまりそれらは、抑圧してきた、解放できていない、犠牲にしてきた（させられてきた）、異なるエネルギーへと代位させてきた影の部分であり、そのとらえ直しは、複数文化的な自己の形成にもつながる。影はネガティブなのではなく、クリエイティブさの源泉だと考えられるからである。こうした関心から男性性ジェンダー論を組み立ててきた。

話を大きくすれば、男性、父親、男の子などに焦点をあて、ジェンダーと男性の視点から、マクロな問題、たとえば戦争、テロリズム、暴力などのハードポリティクスの領域、企業社会、産業組織、科学技術というリーディングセクターの領域とかかわる男性と男性性の特性や存立構造についての考察は大切で面白いものだと思う。もちろん、社会病理的な現実も浮かび上がる。産業社会の抑圧の象徴である(自殺)過労死、ワーカホリック、あるいはアルコール依存症、戦争後遺症、そして犯罪や非行などの逸脱行動まで、広く脱感情作用とでも呼べるような現象と男らしさの病いの相関的な関係がみえてくる。共生、和解、修復、持続、平和という異なる価値を表現する男性と男性性の視点はいかにして構築可能なかと問うことを模索する。

でも今回は、そうしたマクロな話ではなく、個々人の経験に落とししていく話題を紹介しておきたい。男性性がジレンマのようにみえてくるエピソードであるハゲ現象のことである。男性の経験をきちんと視野に収めた研究の蓄積を書評論文集として編集し、男性と男性性の研究の広さと深さ

と面白さを確認したことがある（それを中村彰さんとの共編著としてまとめた『男が見えてくる自分探しの100冊』かもがわ出版、1998年）。これは男性性の見地から社会臨床的な書物をたくさん集めて書評風に紹介し、男性研究を先駆的に論じた書物の読書案内である。そうした観点から、その後にも書評を随時執筆し、男性と男性性の広さと深さの内実を追いかけるようになってきた。たとえば、男性の身体に関する多様な研究がある。なかでも須長史生の『ハゲを生きる－外見と男らしさの社会学』はそうした男性の身体に係留した個性的なものである（勁草書房、1999年）。この書評を『社会学評論』（第51巻・第1号、2000年、日本社会学会）に書いた。再掲して紹介しておきたい。

ハゲた男性の努力は涙ぐましい。見合い写真に墨を塗る、見合いそのものをしないで結婚する、スダレ（バーコード）頭にするなど。本書はこのハゲ現象を対象にしている。著者は、「フェミニズムが語る男性像は比較的素朴で、単純なイメージが深く検討されることなく提示されているように見うけられる」という。たとえば、「男性は暴力的である、男性は競争を好む、男性は女性を支配したいという願望がある」という具合だ。そうではなくてやはり、男性の社会的経験も多様だろうと考えている。その格好の主題にハゲ現象が選ばれた。そもそも男性はどうしてハゲを恥ずかしがるのか。「エラがあろうが鼻がぺっちゃんこだろうが、それほど執着する男はいないと思うよ」、「何で髪の毛だけ執着するんだろう」という語りをハゲの親睦団体、頭光会の会員へのインタビューから引き出す。

男性が経験するハゲ現象は不可解である。

ハゲ意識は「女にもてないからハゲを気にする」ということを基本にして成り立っているらしい。女性からハゲを理由にして嫌われた経験を被調査者は有していないにもかかわらずこの信念をいだく男性たち。著者はこの心的機制を「フィクションとしての女性の目」と表現する。もちろん女性はハゲが嫌いという言い方は女性が外見だけで男性をみているという一面的な見方であることもわかっている。しかし、この意識にとらわれていくことで男性たちは自らを呪縛する。それを丹念にあとづける。「脱毛という事態のなかで徐々にハゲを気にしていく過程」の相互作用分析を行う。ハゲつつある人が髪の毛を気にしているときのしぐさや言葉遣い、独特の髪型などハゲに関する態度こそを周囲の人は気にする。そしてそれが頭髪の不自然さをつくりだし、逆にそこに向かう他者の関心を誘発する行動となる。たとえば、「薄毛を隠そうする行動、当人のハゲを意識した行動（隠すための行為、言動の変化）が他者の特別な行動（視線、言及、嘲笑、からかい）」を導くということだ。この相互作用で成立するのがハゲ現象だとされる。

この過程には、男性研究の重要な環である男性同士の関係がある。女性にもてないとだめだという男性同士の集団的な自意識がハゲを気にするという意識をつくる。老化や加齢による身体変化への反応としての意識だけではなく、「ままならない身体の経験」が意識され、しかも、もてないからとか、きまりわるいという感覚で意味づけされているのがハゲを気にすることだと分析される。

さらに、ハゲ現象のジェンダー論的分析が行われる。「男性が自らの外見のことで『ウジウジ』したり、悩んだりするのは、好ましくないこととして価値づけられている」ので、

ハゲた男性の男らしさ意識は複雑な様相を呈する。ハゲた自分にこだわればこだわるほど、「女々しく、うじうじしない」男になることを演出しなければならない。男らしく振舞うことが求められるのだ。これは男らしさの鎧と重なり合う。

しかし、男性研究には、男らしさから降りる、つまり「鎧を脱ごう」というメッセージが支配的である。男性同士の関係において「鎧」を脱げない男性がいる（ハゲの男性）。これは防衛としての男らしさであり、女性たちから批判的となる「男らしさのメンツ」ではない。男性の社会的経験のなかには、メンツを守ろうとしているわけではないのに、結果として「男らしさの鎧」を身にまとわざるをえない状況があることに分け入った男性研究が求められるということになる。

男らしさの多様性については、ジェンダー研究と男性研究で活躍するシドニー大学のロバート・コンネルが男性性を、支配的、従属的、敗北的（傷ついた）、周辺の、抵抗的などという具合に類型化している。また、米国の男性研究では、ホワイト・マスキュリティとブラック・マスキュリティの差異という具合にも論議されている。ようするに「マスキュリニティーズ」と複数形で語る必要性である。著者も言うように、本書が扱ったハゲと機能的に等価なアイテムはたくさんある。オタク、ちび、デブ、母親依存などだ。さらに、障害のある男性、介護、看護、育児に携わる男性、離婚を経験した男性、くわえて、吃音、顔のアザなども含めて考えれば、ジェンダーとしての男性の分析もずいぶんと幅の広いものとなるだろう。こうして多様な社会的経験を語りながら、男性のジェンダー経験や女性との関係構造の布置連関が浮かび上がる。このような男性研究の動向にも即した意

欲的な研究の成果である。男性研究の理論的座標軸をも整理し明確にした上でハゲ現象を位置づけるとさらに実りがあるだろう。

さて、ここでのハゲは記号の1つである。男性の経験を記述するためのテコのような視点となりうる。男性性が男性や女性を拘束し、ジレンマのようにして事態を困難にしていく。女性発のジェンダー論ではない男性の経験を語るジェンダー論であり、男性性のジレンマがよく把握できる主題がたくさんあることがわかる。老化する身体の影と闘いながらの姿である。他にもこうしたテーマはある。たとえばコミュニケーション問題。寡黙さと感情表現が苦手なことと、親密な関係性における葛藤や表現の不器用さ、行動化・身体化する傾向と男性文化等があり、独特な隘路をもつ男性の悲哀がみえてくる。

Unlearn（脱学習）という言葉にであう

そのようなテーマの1つに攻撃性がある。この気づきは男性問題に取り組む仲間たちとの活動からみえてきた。男性問題の市民活動である。その一環として、1991年頃に*Learning to Live without Violence*（ダニエル・ソンキン著・中野瑠美子訳『脱暴力のプログラムー男たちのためのハンドブック』青木書店）という英語の本の輪読会を始めた。この本は家庭内暴力加害者向けの脱暴力プログラムのテキストに使われているものだ。面白かった。テキストに書かれてあることを基にして話をした。男性としての振り返りをすると、暴力がずいぶんみえてきた。兄弟げんかは日常だった。私は長男で、弟とけんかをした。でもそれは、

兄弟げんかで終わってしまっている。勇ましくてよろしいってことで終わっている。けれども考えてみたら謝りもしないで終わってしまう。でもこれ、理不尽な暴力だ。その男たちの中に、兄に激しい暴力をうけた弟がいた。すごく根に持っているという話しをした。激しいケンカを友人としていたという話しをする男性もいる。いじめられていたけれど、「男の子でしょ！」といわれて我慢をしていた話しもでてくる。両親、とくに女性である母親への反抗も同じだ。もちろん金属バットは持たなかったけど、それに地続きのようなことはいっぱいしていたという。少年の世界には暴力が満ちあふれていることを男性たちが語り合った。男の子だからとこうした暴力は軽くみられてきた。周りもそう言う。振り返ってみれば、当時はそんなものだとやり過ごしていたことである。社会のなかの大きな暴力と自分の生育過程の小さな暴力が重なってきた。私の時代にもいじめはあったから、いじめている加害者をとめられなかった自分を罪深く思っていたことも話がでた。暴力や攻撃性を軸に半生をみつめた。いろんなことが思い出されてくる。自分に向かう暴力も意識されてきた。ハイリスクな行動のことだ。「家族のために・・・」と思って健康を無視して働き続けることも同じだ。この健気な努力も、長期的に見れば自分に対する暴力だ。男の人生をジェンダーの視点で眺め直してみたほうがいいのではないかなった。一種の男たちの意識覚醒 *consciousness rising* である。

後に *Violence is learned. It can be unlearned.* という脱暴力キャンペーンのことを知る。サンフランシスコ市のキャンペーンだった。バスのボディに大きく掲示し

てあった。ポスターもたくさんみた。そこで「*unlearn*」という言葉にであった。強いて訳せば「脱学習」であるが、学び直し、そぎ落とし、捨て去ること等が近い。実践するのは難しいなと思った。けれども救われた感じもした。「学習したものであれば脱学習できる」という希望のある言葉だからである。そして男性の社会化の過程で少なからずの男性たちが暴力やそれとの関係をとおして成長してきた経緯が確認できたので、それは個人の問題だけではないだろうし、逆に、同じ男性文化のなかにあっても暴力的でない男性も多いので、そこにはどんな分岐点があるのか、その際の暴力的ではない経路の規範はどこで学習できたのか等と思考が広がっていく言葉だった。この一言が何かを全部つなげてくれたように感じたのだ。

これは加害者臨床へとつながった。たとえば、大阪で虐待する父親のための脱暴力グループワークを実施しているが、そこでも焦点のひとつは男性の無表情さ *male inexpressiveness* の脱学習である。そのために感情と男性のかかわりをグループワークの素材にしている。二分法的ではあるが、女の子の表出能力や感受力に比べると男性や男の子のそれは劣ると思うからである。暴力は行動化なので、そうではない行動化を代位していく。半ば身体化され、感情面でもコントロールができない自分の暴力を脱学習させていく課題は時間がかかるし、認知的な面での暴力の乗り越えよりも手間がかかる。そのためのコミュニケーション練習をおこなう。たとえばグループワークで、顔の表情をいっぱい書いたものを小さなカードにしてたくさん並べる。「あなたが暴力を振るっているときの顔を取ってくだ

さい、それからあなたがいまこういうグループワークをして変化しているときの顔を取ってみてください」と指示する。その絵を選んだ理由を説明してもらおう。そういう表現練習を繰り返す。絵に託して自分の感情を言葉にする。自分の気持ちを客観視していく。最初はカードがなかなか取れないこともある。どれが自分の顔なのかわからないという。慣れてくるとそれなりにいい具合になる。感情についてコミュニケーションしやすいエモーショナル・リテラシーの練習しながらグループワークをすすめている。

だからこの脱学習は知識の話だけではない。身体・行動、感情・感性、そして親密な関係性から社会的な関係性へと広がるなかでの脱学習としてデザインしている。脱暴力のグループワークは、論理や理屈で、暴力はいけないと教える場ではない。ジェンダーの話しも性差別の話しもこちらからはしない。だんだんと自ら気づいていく過程で必要な言葉と知識は伝えるようにしている。

レポート・トークとラポート・トーク

加害者臨床でよく話をすることにレポート・トークとレポート・トークがある。古い話だが、かつて『讀賣新聞』に「あなたへ」という生活欄があり、そこで父親の子育て体験を掲載していたことがある。「レポート・トークしてますか」と題したその一文が以下である（『讀賣新聞』1998年9月18日付け）。

男のコミュニケーションの仕方は、やはり「男らしい」。言葉遣い、語彙や話題の選び方、

話す時のしぐさなど、どれをとっても「男らしい」コミュニケーションがある。

事実を伝えるコミュニケーションを「レポート・トーク」、相手に共感し、関係をよりよいものにしようと気持ちを伝えるコミュニケーションを「ラポート・トーク」という。

レポートとは記録し、報告すること。伝えるべき事実や数字が問題となる。言葉遣いやしぐさも感情的でなく冷静でなければならない。

ラポートとは関係づけること。相手との信頼関係を築くことが何よりも大切だ。話の中身よりも、その人と話すること自体に意味がある。

男のコミュニケーションは、このバランスがよくない。どちらかといえばレポート・トークが多い。聞き手の興味や関心に反応するというよりも、自分の伝えたいことに力点が置かれている。「そ うね」とか「なるほど」とか相づちを打つことも少ない。

米国でプレスクールに通う娘がうまくやっているか心配で、電話をかける。どんなことをしたのか、授業はどうか、先生はおもしろいか、どんな友達ができかなどと聞いてしまう。

これはレポート・トークの典型。こんな質問にうまく答えられるはずがない。質問というより尋問に近い。

そこでラポート・トーク。「通い始めたばかりのころの気分を色で表すとどんな感じ」と聞いてみた。

「うーん、そうね黄色かな」と娘。

「黄色ってどんな気分の色？」

「ちょっとドキドキの気持ち。信号の色と同じ」

「もっと学校に慣れて楽しくなると青になる？」

「ちょっと違うかな。楽しくなるともっと色が多いの。クレヨンの箱のような感じかな」

「思い出した。ねえねえ、今度もっといっぱい色のクレヨン買って。どんだん気もちが変わるともっと色がいるかもしれないでしょ。」

「そうかもしれないね」

「ねえねえ、50本くらいのクレヨンみつけたの。買ってね。」

話はどんどん広がり、学校が楽しいかどうかなんてことは、どうでもよくなってしまふ。まあ娘の楽しそうな暮らし方が見えたので一安心。

親ばかな話であるが、子どもの感じる世界の色は自分で表現して塗ればいいので、それが何色かどうかは子どもが決める。黄色だから青になって欲しいという親の案じる気持ちは親の精神安定のためでしかない。こうした会話は娘に鍛えられたラポート・トークのおかげである。グループワークでいつも練習している。

それからもう一点、セルフケアを強調する。「自分のために花を買ったことがありますか」とアメリカの脱暴力グループワークで進行役が暴力男性たちに尋ねた。とても印象的なやりとりだった。「では今日はグループワークの帰りに、バラ一本でいいから自分のために花を買ってみてください」と彼はみんなにすすめた。これは自分をケアしてくださいというメッセージである。日本のグループワークでも男性たちに同じ事をすすめる。自分がケアできれば他人もケアできるはず、ケアする能力をもっと身につけて欲しいとグループワークでは話をする。子どものケア、自分の親のケア(介護)、色々な意味でのケア役割を男性も発揮しなければならぬ時代となった。他人のケアだけではなくて、自分のケアも含むことが重要なメッセージである。

感情がないのではなく、それを表現することのほうへ

こうしてみると、男性の無表現さ、コミュニケーション下手、寡黙さは精神医学でいうところの失感情症(失感情言語化症、感情言語化障害、Alexithymiaアレキシサイミア)のようでもある。「シフニオス(Sifneos PE)が提唱した心身症患者の特徴的な性格の1つ。自分の内的な感情に気づくことと、その表現が制約された状態をいう。ギリシャ語のa=lack(欠如)、lexis=word(言語)、thymnos=emotion(感情)から造られた言葉である。・・・具体的には、空想的想像力に乏しく感情表現が下手で、面接では事実関係のみ描写し交流がとりにくい。精神生理学的には、情動の中枢である辺縁系と認知表現の中枢である大脳皮質との機能的な乖離と解釈されている。一方、器質的疾患で危機的状況(透析、癌、ICUなど)の患者では、心理的防衛反応として失感情症がみられ、フライバーガー(Freyberger H)はこれを二次的失感情症と名づけている。」(『医学大事典』、医学書院)。もちろんラベルを貼ることが目的ではないが、こうした名づけがあるとその傾向性も含めて個人の問題ということだけではない側面が見えてくる。

この点をめぐる男性心理学の議論がある。ハーバード大学のRon Levantは男性の感情表現の弱さが北米諸国では一般的に確認でき、それを「マイルドな失感情症」と名づけた。信頼できる稼ぎ手であることに答え、感情的にはストイックで、論理的で、問題解決思考に長け、攻撃的であることを期待する男性文化は男性個人にある特性をもたらすとし、そう名づけた。それに対してJason Thompsonという心理学者が批判し、それは断定的であり、「トロント失感情症評価尺度 the Toronto Alexithymia

Scale (TAS-20)」を使ったフィンランドでの調査等を紹介し、そこから二つの要素をとりだし、男性は第2要素である「感情を表現することの困難」(difficulty in describing feelings)では女性より高いスコアとなるが、第1要素である「感情を同定することの困難」(difficulty in identifying feelings)では差異はないという研究を紹介している。つまり、感じていないのではなく、それを表現する点においての違いがあるので、一般に男性が失感情的あるいは無感情的なのではないと批判した(この研究は、'Emotionally Dumb: An Overview of Alexithymia'に詳しい。現在は Amazon の Kindle 版で購入できる。)

ここで述べてきた絵本の読み方練習、レポート・トーク、セルフケア、土地と人間関係への感受性、エモーショナル・リテラシー等の一連の話はトンプソンのいう第2要素の課題を意識したものである。このマガジンでよく引用する映画も感情表現とかかわるのでそのかたちとして私にとっては大事だ。こうしたことは男性・男性性にとっての影としてみるといいのではないかとここでは書いてきた。それを可視化させるようにしているんな試みを続けているし、実践の視点を大切にしているつもりである。

こうして、社会臨床の視界に入り込んだ影は私にとっては心地よい発見をもたらしてくれている。もちろん、そこにも既製品としてのファンタジーが文化産業によって構築されており、なかでもエロスをめぐっては安易な性産業が膨大に横たわっているので、それらに取り込まれぬような注意もいるが、身体感覚、生の光景や原風景、多様な表象、映像によるファンタジー等をおして、男性と男性性をめぐるその影の世

界を渉猟してみると、すべて第2要素の手がかりとなり、創造性が増していく。こうした意味で、自由な想像の世界に遊ぶことは、私にとっては、既製品のファンタジーや男性文化に溺れないという意味でも精神の健康を保たせてくれるよい機会となっている。

なかむら ただし
(社会臨床学・社会病理学)
2011年5月28日脱稿